

平家物語

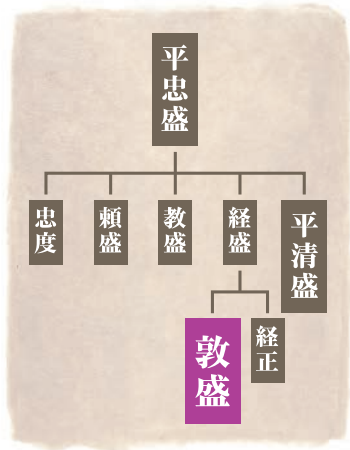
敦盛

平家の栄華と没落を描いた有名な軍記物語『平家物語』は、鎌倉時代(1185-1333)に成立し、琵琶法師による音に乗せて津々浦々に語られていきました。『平家物語』は、後世の芸術にも大きな影響を与えました。中でも敦盛の段は、悲劇の主人公としてさまざまなジャンルの作品に取り上げられ、多くの人に知られています。



勝川春章画 平敦盛(シカゴ美術館蔵)

平敦盛は、平清盛の弟・経盛の末子で幼少から笛の名手として知られていました。なお、兄の平経正は琵琶の名手です(音楽でつづる文学2平家物語―竹生鳥で登場)。敦盛は父から「青葉の笛」を授けられます。かつて敦盛の祖父・平忠盛が



鳥羽院より賜ったという名品ですが、『平家物語』では「小枝」という名前で伝えられています。16歳であった敦盛が初陣を飾ったのは、元暦元年(1184)2月7日、後世「一の谷の合戦」と呼ばれる激戦でした。

『平家物語』巻第九「敦盛最期」は、一の谷の合戦の終焉、源氏の武将熊谷次郎直実が、海上へと逃れる平家の武将を呼び止める場面から始まります。一騎打ちの末、取り押さえたのは若き青年武将でした。武士の務めとはいえ、わが子と同年輩の高貴な公達敦盛の命を奪うめぐり合わせになってしまった熊谷の悲しく辛い心情を描いています。

この物語を山田流箏曲では、明治中期に軍歌としても親しまれていた新体詩を歌詞にして、山登万和(1853-1903)が「須磨の嵐」として作曲しました。激しい戦を表現する手事(歌と歌の間に挟まれた長い器楽部分)と、悲壮感あふれる語り物部分が対照的です。

明治中期以降の山田流箏曲を代表する曲といえます。

大和楽「須磨の敦盛」は、舞踊のために平成3年(1991)に作られた「兵庫旅情」全三部のうちの一つです。本公演では、敦盛を花柳寿楽が、熊谷を花柳基がそれぞれ立場を務め、新たな振付でご覧いただきます。この公演のために振付をした五代目花柳壽輔さんに、お話を伺いました。

平家物語 敦盛の振付にあたって

五代目 花柳壽輔

曲を聴いて、全体の大まかな構成が自然と浮かんでまいりました。物語の情景が浮かぶ綺麗な曲というのが第一印象です。

振付をする時にポイントとしたところは、元々この作品は昨年九月に亡くなった祖父二代目花柳壽應にいただいたお仕事で、延期もあり祖父が唯一残っていた仕事でもありました。祖父だったらどう創るだろうということを含め、また曲を聴いた上で得たイメージから配役が浮かび、おのずと振りもおりてきたような感じでした。

敦盛や熊谷に関しては実際に兵庫県の須磨へ足を運



振付風景(前:花柳壽輔、奥:花柳源九郎)。本年1月、稽古場にて



「青葉の笛」とされる笛が、現在も兵庫県神戸市の須磨寺に保存されている。(資料提供:須磨寺)

び敦盛塚や須磨寺の宝物殿の展示を通して感じたことも反映できたと思います。歌詞にも出てまいります青葉の笛なども実際に保存されており感慨深かったです。敦盛は歌詞に「十七歳」とあり、演じる寿楽さんの御息がちょうどそのくらいだとお稽古の際に談笑しておりましたが、年齢や性別に関係なくさまざまな人が踊りとして人物像を表現するのも日本の伝統芸能の醍醐味だと思います。

音楽でつづる文学4

平家物語 一敦盛一

解説「平家物語」に描かれる敦盛
平家琵琶「敦盛最期」
山田流箏曲「須磨の嵐」
大和楽「須磨の敦盛」(花柳壽輔振付)

7/15
木
18:30

※公演開催についての最新情報は
紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。